

都市建設委員会行政視察報告書

令和6年7月31日

つくば市議会議長 五頭 泰誠 様

都市建設委員長 皆川 幸枝
(公印省略)

本委員会は、下記のとおり行政視察を実施したので、報告します。

記

1 視察期間

令和6年5月22日（水）から令和6年5月24日（金）まで

2 視察先及び視察事項

(1) 青森県三沢市

・三沢スケートボードパークについて

(2) 青森県むつ市

・Park-PFIを中心としたコンパクトシティ事業について

(3) 青森県八戸市

・中心市街地のまちづくりについて

3 視察目的

本委員会所管に係る上記事項について調査研究し、本市の都市建設行政の発展に寄与する。

4 参加者 計6名（委員4名、議会局(随員)2名）

委員長 皆川 幸枝

委員 小久保 貴史、鈴木 富士雄、塩田 尚

議会局 大坪 哲也、藤代 拓

5 研修内容

(1) 青森県三沢市【5月22日（水）説明：三沢市市民生活部市民スポーツ課】 「三沢スケートボードパークについて」

三沢市では、三沢スケートボードパークについて行政視察を行い、担当者から詳細な説明を受けた。

三沢市では、東京オリンピック・パラリンピックにおけるストリートスポーツの機運向上によりアーバンスポーツへの注目度が高まっているところだが、その種目の一つであるスケートボードができる環境が少なく、施設整備の声がありながら市民ニーズが把握できない状況であった。

その課題解決の一環として、市中心部の商業施設「スカイプラザミサワ」内に「三沢スケートボードパーク」をオープンさせた。人の流れを創出し賑わいづくりとするとともに、スケートボード施設のニーズ調査を行っている。

運営は、三沢市商工会が市の補助を受け行っており、管理人を配置して管理している。広さは140.58平方メートルで、営業時間は木・金曜日が午後2時から同5時まで、土日祝祭日は午後1時から午後5時までとなっている。一般料金は500円だが、高校生以下は無料。インストラクターは不在で教室等も実施していないが、施設のオープニングイベントではNPO法人高崎スケートボード協会代表を招へいしてデモンストレーションやスケートボード教室などを行った。

市からの補助金対象期間は、令和6年3月から令和8年3月末までであり、利用状況を精査した上で、その後の運用を検討する。三沢市は、スケートボードパークの運営を通じて、中心市街地の賑わい創出のほか、市民が運動する機会創出や三沢基地に隣接することを生かした新たな日米交流の機会を期待している。



(2) 青森県むつ市【5月23日（木）説明：むつ市都市整備部 都市計画課・コンパクトシティ推進室】

「Park-PFI を中心としたコンパクトシティ事業について」

青森県むつ市では、Park-PFI を中心としたコンパクトシティ事業についての説明を受け、現地視察を行った。

むつ市は、今後の人口減少、高齢化及び空き家の増加等の問題に対して、課題解決の取組として「アゲハが輝くまちづくり」をテーマとした都市計画の下コンパクトシティの取組を進めている。全国初の「居住調整区域」設定等を行うなどの一連の施策の実施を経て、国土交通省の「コンパクト・プラス・ネットワーク都市」の選定を受けた。

コンパクトシティ関係施策の一環として、むつ市が設置する都市公園内で飲食店、売店等の公園施設（公募対象公園施設）と広場や遊具等（特定公園施設）の設置・管理を行う民間事業者を公募により選定する「Park-PFI」を導入し利便性・魅力の向上を図っている。

市活性化施策のモデル事業として、市内の公園である「代官山公園」に Park-PFI を導入し、コロナ禍を経て令和4年に「PARK DAIKANYAMA」としてオープンした。むつ不動産センターが管理・運営を行っており、公園内では、宿泊用トレーラーハウス、常設テント、園内広場や小料理酒場・ピザ販売店飲食店等の施設を整備しているほか、公園内で夜のイベントやヨガ教室など各種イベントを行っている。Park-PFI を導入した結果、以前は年間利用者が300人程度であったが、導入後は年間約16,000人が利用する公園となり、市内の新しいまちづくり拠点として賑わいを見せている。



(3) 青森県八戸市【5月24日（金）説明：八戸市商工労働まちづくり部
まちづくり推進課参事】

「中心市街地のまちづくりについて」

八戸市では、中心市街地のまちづくりについて説明を受け、現地視察を行った。

八戸の中心市街地の町割は、藩政時代の城下町の雰囲気の色濃く残しており、現在八戸市では、都市におけるイノベーションの創出と人間中心の豊かな生活を実現する観点から、車中心から“人中心”の街としてのまちの魅力を見出す取組を行っている。

その一環として、八戸市ではコンパクトシティ施策である心市街地活性化に向けた計画づくりを進めており、第3期八戸市中心市街地活性化基本計画は、策定後内閣総理大臣の認定を受け、現在国による支援を受けている。令和5年には中心市街地における将来のまちづくりの方向性を定める「八戸市中心市街地まちづくりビジョン2023」を策定しており、各中心市街地各エリアを分析するなどしてまちづくりのテーマを定めた。

コンパクトシティの具体的な取組として、平成23年に八戸ポータルミュージアム「はっち」を開館し、市民が集い講演やワークショップを行うほか、八戸の歴史や文化に触れることのできる展示を配置し文化的活動を支援している。また、内部には育児スペース「こどもはっち」を併設し、子育て相談等も行うことができる空間を整備している。

また、平成28年には専門書を中心とした書を配置する「八戸ブックセンター」、平成30年には市民の憩いの場である八戸まちなか広場「マチニワ」、等の文化施設を中心市街地に開設した。これらの施設には「公共施設はオープンな空間」という考えが通底しており、市民のためのスペースが設けられている。

中心市街地に商業拠点のみならず、文化・交流・スポーツ施設を整備することで、誰でも気軽に立ち寄り、人が集いコミュニケーションが生まれる場を配置し、歩いて回遊できる範囲に市民利用の多目的な施設が集積する市中心地の環境を創出している。



【行政視察所感欄】

今回の視察では東北地方の3都市を視察し、多くの示唆や刺激を受けることができた。

まず、最初に視察した三沢市は、豊富な海産物や農産物に恵まれ、米軍基地のあるまちとしても知られている。まちなかには、英語表記の店舗や制服などの米軍用品を販売する店もある。そのまちなかの商業施設の一角に、三沢スケートボードパークがあり、その管理は商工会が担っている。つくば市が昨年開設した流星台スケートボードパークはコンクリート製だが、三沢スケートボードパークでは木製のパネルで作られているため、転倒時の衝撃がやわらげられる効果がある。そのためか、小学生以下の小さな子ども達も参加でき、ヘルメットを着用して練習に励んでいるとのことだった。広さも、大きくない空き店舗一室程度の広さで、隣は、飲食店や小売店舗で、身近な買物ができる場所にあり、市民が気軽に利用できるのは大きな魅力である。地方都市でも例にもれず、子どもの遊び場や居場所が限られている昨今、このような施設が子どもが歩いていける場所にあることは、子どもの成長にとっても非常に重要だと思う。スケートボードは、2021年の東京オリンピックで大きく注目度が上がった競技で、さらに、パリオリンピックにつくば市出身の草木ひなの選手が出場するこの年に視察できたことも印象的であった。

次に視察したむつ市では、今年、日本ジオパーク全国大会が開催される予定で、この点でも記念となる視察であった。視察項目は、つくば市にとっては県から洞峰公園移管を受けるきっかけとなった「パーク PFI 事業」である。茨城県とむつ市の進め方で大きく違ったと感じたのは、パーク PFI を導入する前の段階で、試験的取組を行った点である。むつ市代官山公園は、高台にある城址公園で緑も多い公園である。住宅地の中にあるという点では洞峰公園と相似しているが、利用者数においては、パーク PFI 導入前は、利用者数が年間 300 人程度と、洞峰公園とは比較にならないほどのトイレも無いような小さな公園であった。その後、この公園を活性化するための手法としてパーク PFI を活用し、手を挙げた地元の不動産会社と協働することで多くの利用者が訪れる公園となるのだが、事業実施に当たって導入前の試験的なイベントとして、夜間のキャンドルナイトや焚火キャンプなどを実施し、魅力的なチラシを作成することでたくさんの人に参加してもらった機会を作った。そのイベントでは、飲食はもちろん、アルコールなども提供しており、市民が「こんな公園にしたい」という体験を実感できたことは大きな効果だと感じた。行政が斬新な取組を始める際には、市民が実感し、その実体験を通じた意見を反映させたり、対話したりして進めることで、市民の不安を取り除くことが不可欠である。これが洞峰公園で

実施できていたら、流れは違っていたのではないだろうか。

最後の八戸市視察でも大きな学びを得ることができた。八戸市には東北新幹線停車駅である八戸駅がある一方で、在来線の本八戸駅周辺には古くからの中心市街地があり市役所や美術館などの公共施設、多くの商業施設やバスセンターがあるが、百貨店等商業施設の撤退や人口減少などにより衰退傾向にある。国内の地方都市のほとんどがそうであるように、中心市街地の活性化が課題であり、取組を進めている。つくば市では、つくば駅前のセンター広場を中心に市街地活性化計画を策定し、取組を始めているが、視察を通じて、八戸市では市民の意欲が強いと感じた。特に、中心市街地で行われる八戸市の三社祭りは、約 300 年の歴史があり、まちなかにもその色が出ている。神話や歌舞伎を題材にした山車は、それぞれの地区ごとに住民が自らの手で製作しており、また、観覧する住民も祭りを待望しているなど市民が大きな誇りと愛着を持っているのが感じ取れた。つくば市は、まつりつくばが市を挙げた象徴的な祭りであるが、合併する前の市町村や各地域には古くから伝わる祭りがあったが、それが一部では廃れつつあるのが残念である。

八戸市が中心市街地内に整備した、まちのポータルミュージアム「はっち」も視察を行った。施設を案内してくれたボランティアの住民は郷土愛にあふれ、自ら「はっち」を運営しているというほどの誇りが感じられた。はっちでは、八戸の歴史や、文化、工業、商業が紹介され、また一坪チャレンジショップでは、自分が得意な手芸や手作り品など多種多様な物販があり、貸会議室では、社会運動を発信する講座も開かれ、多くの人が訪れていた。

以上、本州最北の青森視察で、風土を体感し、環境を理解しまた人々に触れることで、その意気込みや工夫を凝らした取組を知ることができ、大きな活力をもらった視察となった。

都市建設委員長 皆川 幸枝